

令和 5 年度 修士論文

「コロナ禍での博物館の取り組み「おうちミュージアム」の全容を明らかにする―博物館側と利用者側双方に着目して―」

【キーワード：SNS、インターネット、デジタル、新型コロナウイルス、おうちミュージアム】

## 要旨

本研究では、複数の館で連携して取り組まれたオンラインでの取り組みであるおうちミュージアムの全体像を明らかにすることを目的とする。このとき、先行研究の課題から、コロナ禍という特殊な状況の中で実施され、複数館が連携して取り組んだ活動であるおうちミュージアムが参加館・利用者の双方から見てどのような活動だったのかという点に着目した。

序章では研究の背景から課題点を見出し、それを踏まえて本研究の目的と手法、構成を述べた。

第 1 章「おうちミュージアムに関する日本の社会動向と先行研究」では、おうちミュージアムの活動の背景にある社会動向を踏まえて、先行研究を整理しそこでの課題点を整理した。

第 2 章「おうちミュージアムの活動の実態」では、おうちミュージアムの実態を把握することを目的とし、各参加館のコンテンツを一つずつ目視で調査を行い、おうちミュージアムとして公開された内容を整理した。そこからメディアや公開時期、SNS でのコンテンツ公開、コンテンツの内容、添えられたメッセージといった点から分析を行い、先行研究と合わせておうちミュージアム開始当初から現在までの活動の状況を復元した。

第 3 章「Twitter におけるおうちミュージアム利用者の反応」では、Twitter の投稿から当時の投稿を取得したうえで投稿内容や推移などを分析し、コロナ禍当時の Twitter ユーザーがおうちミュージアムに対し、どのような反応を示していたのかを明らかにした。

第 4 章「博物館関係者のおうちミュージアムへの対応」では、おうちミュージアム参加館の職員に対するインタビュー調査の詳細と結果を示し、回答の内容ごとに分析を行った。それによって、担当者が当時どのように活動に取り組んでいたかを明らかにした。

第 5 章「おうちミュージアムの全容」では、第 2 章から第 4 章までの内容と先行研究を踏まえて考察を行い、コロナ禍の中で実施され、複数館が連携して取り組んだおうちミュージアムが参加館・利用者の双方から見てどのような活動だったのかを明らかにした。これについて、おうちミュージアムは、博物館側にとってリアルな博物館体験が損なわれている現状に対しての緊急措置であり臨時休館後の来館を見据えて位置づけられていたことや、各博

博物館のデジタル化において中心人物の影響が大きいことを指摘した。一方、利用者については、高度なデジタル技術の使われたコンテンツであることが利用者反応の有無につながっているわけではなく、投稿が多かった館の特徴としてSNSの特徴である流行り廃りの速さに関して、おうちミュージアムに参加が早かった館やその分野や館の既存ファンの存在が多い館に反応が多かったことを明らかにした。また、オンラインの活動においては、従来通りのリアルでの活動とは異なり、web や SNS を使って自ら反応を得る行動をする必要があることを指摘した。

終章「本研究のまとめと課題」では、各章の内容を整理し今後の課題について述べた。